

喫茶店文庫
2022年9号

お題
彼岸

喫茶店文芸 2022年9月号——目次

モモ

彼岸花

1

山中
隆司

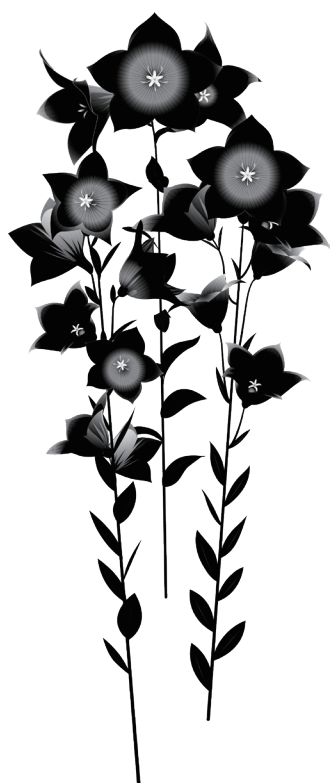
常世の国への旅

7

マサユキ・マサオ

教育

13





毛毛
彼岸花



いつそ毒々しいほどの鮮やかな赤に目を奪われ、つい足を止め
てしまったらしい。

先に行つてた友人がわざわざ戻つて声を掛けてくる。

「おい、春秋^{ハルキ}どうしたんだよ？ お前に花を眺めるだなんて趣味
があつたとは思わなかつたなあ……」

その言葉には揶揄の響きが含まれていた。確かに友人の言う通
り春秋は花を見てという様なタイプでもない。だが、その時は足
を止める理由があつたのだ。

「……前期のテスト前、俺講義を休んでいたことがあつただろ？」

「ああ。大事な時期に必修講義を休むものだからどうしたのかと。
ノート貸してやつただろ」

「お陰で留年の危機は免れた、恩に着るよ。おかげでこうやつて
旅行に來れた」

「もう夏季休暇も殆ど終わりがけだろ？ お前、不義理しやがつ
て……。おかげで大学2年の夏休みは殆どお前抜きだったじゃな
いか」

そう、友人の言う通りだ。春秋はこの夏休みの殆どをバイトに
も旅行にも行かず家で引き籠つていた。元々インドア派だったと
いう訳でもない。昨年^{昨年}の夏は大学で出会つたこの友人と共にリ
ゾートバイトに繰り出して大いに稼ぎ、大いに遊び、大学に戻つ
てからはアジア系の留学生と間違われるほど夏を謳歌したもの
だ。

この友人、夏野^{ナツノ}は「春と秋の間には夏が居るべきだろ！」と初
対面から何故か距離を詰められ、そのまま親友と呼ぶべき存在に
なつていた。気恥ずかしいので面と向かつては言つてやらないし

あちらも言つてこないが、お互いにそう思っていることは察して
いる。

夏野は初対面からの出会い方からして分かるように、人との距
離の詰め方をよく分かつていない男だ。

二人で居る時は他の人に対しても喧しいほどだが、一人になる
と途端に静かだと他の学友達にも聞いたことがある。

大学以前の話をしながらないし、長期休暇の時にも「帰省する
金もつたないし、退屈だから」と地元の悪口を言うばかりで
碌に帰りもしない。

恐らく……、夏野は人間関係を上手く築けないタイプなのだろ
う。受け身気味な春秋とは相性が良いだけで、初対面では相当な
勇気を振り絞つたものと付き合いが長くなる内に察せられた。

引き籠りな春秋など放つておいて、他の学友達と夏を謳歌すれ
ば良かったのだ。実際、そういった誘いはいくつもあつたが夏野
はいつもなんやかんや「俺だけ楽しんでたら春秋がいじけるから」
などと理由を付けて断つていたようだった。

この偶然然出会つた別の級友からそんなことを聞かされ、「お
前達、ほんと仲良しなのな」と笑い交じりに言われたのは記憶に
新しい。

夏季休暇の終わる直前の9月中旬、意を決したかのように夏野
から誘いがあつた。そして春秋もようやく誘いを受け入れ、今二
人でここに居るのだ。

「……悪かったよ。四十九日だったんだ」

理解してない顔の夏野に再び繰り返す。

「四十九日、俺のばあちゃんが死んでから49日経つたんだよ」

祖母は花の好きな女性だった。共働きの両親に代わり、小学校に上がるまでの春秋の面倒をよく見てくれて、散歩で見かける花の一つ一つ、名前やその由来などを丁寧に語ってくれたものだった。……オオイヌノフグリに大喜びしたことは幼子故許されたい。春秋の家の目の前は田んぼであり、畦道や野原に咲く雑草一つ一つでよく遊んだものだ。

少し行くと川辺があり、そこは秋になると丁度今日の前に咲くこの花——曼殊沙華の群生地であった。周りが住宅地など風情が無かったため近隣住民しか来なかったが、実際その規模はなかなかのものだった。

割と背の高い花で、まだ幼い春秋がそこに近づくと顔のすぐそばに花が来る。その花というのも、チューリップや桜のような一般的な花の形状ではなく奇怪な見た目をしているものだから、色も相まって幼い春秋は怯えたものだ。おまけに祖母は毒まであるという！

『あらあら……。怖がらないでハルちゃんたら。曼殊沙華はね、怖いお花じゃないのよ？』

祖母曰く、曼殊沙華は天上に咲く花なのだという。

『仏さまが居る天国に咲くお花なの。だから、少し変わった形をしているのよ』

そう言われれば現金なもので、先程まで怖かったはずの花が全く違うものに見えてくる。それに真っ赤なものも戦隊ものの赤みた

いでカッコいい。赤はリーダーの色だ。

『色々なお名前があってね……。ハミズハナミズ。これは他の花と違って花と葉っぱが一緒に咲かないからなの。ね？ 特別なお花なの。特別なお花だから、他の花とも形が違うだけよ。怖くないでしょ？』

それでもまだ少し怖気づく春秋に、祖母は優しく続けた。

『それにね、毒があると言ってもその毒は悪い毒じゃないのよ。曼殊沙華はね、こうやって水辺や田んぼの傍に沢山植わってるでしょ？ これは昔のお百姓さんがわざわざ植えたものなのよ。ハルちゃんモグラって分かる？ そう、おりこうさんねえ！ 鼻がとがってて、目が小さくて、土の中に居るモグラよ。

モグラはね、たまーに土を掘りすぎて田んぼの土手に穴を開けてしまうの。そしたら大変！ 田んぼに張ってあるお水が流れて、ご飯になる稲が枯れちゃうでしょ？ モグラも溺れて死んじゃうの。

そんなことにならないようにね、曼殊沙華は毒でモグラを近づけないようにする役割があるのよ。モグラだけじゃないわ、虫よけにもなるっていうし……。良くないものを遠ざけてくれるの。

それにねえ手間暇かければ、曼殊沙華だって根っこが食べられるんだし……。』

それを聞いた途端孫のお腹がぐうぐう鳴り出して、食べたい食べたいとせがむのを祖母はおかしくてたまらないとも言いたげに笑っていた。

『ハルちゃんたら、食いしん坊さんねえ！ 曼殊沙華は悪いもの』

を寄せ付けない役目があるんだから、食べちゃだめよ。もっと美味いものは沢山あるんだから」

そしてふっと真顔になってこう続けた。

『ハルちゃん、このお花はねえ……、ヒガンバナとも言うの。いつか……、いつかになったらこのお花を見ておばあちゃんを思い出してね。』

大きくなったら、きっとハルちゃんにも意味が分かるから。

それとね、とても綺麗なお花だけど近付き過ぎちゃだめよ？
なんでって……。近付き過ぎたら欲しくなるでしょ？ 折ったりしたら汁が目になって飛んで病気になるかもしれないし……。それにヒガンバナのある所は水辺が多いからうっかり溺れてしまうこともあるかもしれないし……』

祖母は言葉を選んでいたが、最後は諦めてこう告げた。

『いいことハルちゃん？ 兎に角、ヒガンバナより向こうに行つてはダメ。ヒガンバナは目印で、境界なの。悪いものを私達に近寄せないようにしてくれる大事なものの。ハルちゃん、ヒガンバナの向こうに居る人から誘われても着いていっちゃだめよ』
それに幼い春秋はどう答えたのだったか……。祖母がうなずき返したのは覚えていたのだけだ。

いけない、幼い頃の思い出に浸って黙り込んでいた。顔を上げれば、気まずそうな顔をした夏野が所在なさに佇んでいる。

目が合えば、どういう表情をしたものか迷ったのだろう。その心情そのままに何とも言えない微妙な面持ちになっている。

「わりい……。知らなかったんだ」

「いいや……。俺も、何と言うか……。言えなくて。ばあちゃん、小学校に上がるまでは一緒に暮らしてたんだ。それでうちの父親の仕事の都合で別々に暮らし始めて……。小学生位まではよく遊びに行ってたんだけど、中学生辺りからはなんとなく、あまり会わなくなつて。高校生になったら正月くらいしか顔を合わせないし、会つても何を話せばいいか分からないし……。」

そうこうしている内に、ばあちゃん、入院しちまつて……」

そう、それっきり寝付いてしまった。お見舞いに行つても祖母は置物のように眠るばかりで、ヒトがモノになつてしまったことに春秋は内心怯え……。後は両親に任せたまま知らんぷりをしていた。突如突き付けられた自らというもの——臆病、卑怯、無力——そういったものに向き合うことが出来なかったのだ。

そうこうしている内に祖母は逝つてしまった。文字通り眠るようにして……。

「なんだろうな……。俺は薄情な孫だったんだ。ばあちゃんが死ぬってことは分かってたけど、そこから目を逸らして何でもないふりなんかをして……。いざ事が起こる時までそうやってればやり過ごせると思つてたんだ。ばあちゃんが居なくなつた途端、あれやこれや思い出して他のことが出来なくなつた。悪かったな、夏野」

春秋の言葉に夏野はぎくしゃくと首を振った。そんな夏野を安心させるように春秋は笑いかけた。

「わかってるよ、もう踏み切りつけなきゃな。四十九日も終わっただんだ」

その言葉に今度こそ夏野は、何度も頷く。

そのまま「行こうぜ!」と足を進めるものだから、春秋も続くとしたがそこで再び足を止める。

「夏野、お前どこからそっちに行っただんだ?」

曼殊沙華の花は切れ間なく咲き誇っており、二人の間を隔てている。左右を見回してもそれらしき道も無い。

「どこってそこら辺を適当に……」

「跨ぎ越えられるような足の長さしてないだろ、お前も俺も」

もしかして夏野は踏み越えていったのかもしれないと注意深く見るも、特に茎や花の折れた箇所もない。

「春秋、いいからさっさとこっちに来いよ!」

「いや、待って。こういうのは踏みまうと来年以降花が咲かなくなるがあるんだ」

これだけ見事に咲き誇っているものを自分が台無しにするなんてことは避けたい。ましてや、これは祖母との思い出の一つだ。

「春秋、時間が無いんだってば!」

「花を踏みたくないだけだ、ちょっと左右に回り込んでみる……」

春秋はそのまま曼殊沙華の群れに沿って左右を歩いてみるも、どこまでも花は続いていて踏み越えられそうにない。

夏野は花を挟んで追ってきて早く来いだのと騒ぎ立てるが、渡る為の道も無いのに一体どうしろと言うのか。

「春秋、さっさと踏み折っちゃえよ!」

とうとう春秋は観念してこう言った。

「なあ、夏野……。これはばあちゃんとの思い出の花なんだ。

四十九日も終わったばかりで踏み荒らすのも忍びない。だから……。お前が一度こちらに来て道を作ってくれよ、そしたら俺もそっちに行けるから」

そう言った途端、先程まであれほど喧しく騒いでいた夏野が顔色をなくして黙り込んだ。

「……夏野?」

「……出来ない」

だろうな、と春秋は頷いた。先程から聞こえる川のせせらぎに耳を澄ませる。

「……この川は、俺とお前どちらの側に流れているんだろうな」

そうだ、大学生の男二人がわざわざ曼殊沙華を見に鄙びた田舎などに来るはずもない。

こんなに切れ間なく、永遠に続く花畑があるはずもないのだ。

「夏野、悪いが此処でお別れだ。お前と俺はこの花畑を離れてお互い逆の方に進まなきゃいけない。分かるな?」

夏野はただ涙を流していやだいやだと呟いている。それに構わず春秋は語り続ける。

「ここからじゃ分からないが……。多分、この水音は所謂三途の川のものだと思う。臨死体験って本当に花畑と川なんだな……。テンプレって感じた。人間の深層意識とかユングとかフロイト」

だっけ？ ああ……、まあ、どうでもいいかあ……」

そう今となつてはどうでもいいことだ。すすり泣く夏野もどうせ、氣にするまい。

さて、死因は何だったのか。二人同時ということであれば何かの交通事故かもしれない。お互い免許は持っていなかったので、恐らく公共機関の利用だ。高速バス事故が最近ニュースになっていたからその可能性もある。少なくとも互いのせいではない、そう思えばこんな状況なのにほっとした。まあ、片方が死亡するほどの事故だ。生き残った方もリハビリが大変だろう。

「夏野、俺はこの花畑を踏み越える氣になれないし、お前は踏み越えられない。多分、俺達は分かれたってしまったんだ。それは悲しいことだけれど……どちらが生きるにせよ、死ぬにせよ、兎に角俺達は自分に相応しい所に行かなきゃいけない。分かるだろ？」
夏野は先程から嫌だ、寂しい、行かないでとそれしか言わない。それでも、二人このままずっと此の岸に留まっている訳にもいくまい。

「俺はもう行くよ。この花……、彼岸花が咲いたらお前を思い出す。お前も俺を思い出してくれ」

それだけ告げて、花畑に背を向ける。行かないでくれ！　！と背後からの絶叫は耳に入ったが、足は止まらなかった。

曼殊沙華は悪いものを近づけない役割がある。ならば、春秋が『悪いもの』になつてしまつていたとしても、あの花が夏野を自分から守ってくれるはずだ。勿論その逆も。

春秋は振り返らずに歩き続ける。周囲は霧が立ち込め足元も定かではない。夏野の声ももう聞こえない。だが、恐ろしくはない。

これから先がどこへ続くのが、いずれまた懐かしい人にあの
真つ赤な花と共に出会えると分かつたのだから。



山中 隆司
常世の国への旅



今、私は見知らぬ山伏装束の男に掴まって空を飛んでいる。あたりは水の底を思わせるほど仄暗く、星明りを思わせるきらめきが点在している。このまま本当におばあちゃんに会えるのだろうか怪しい。

なぜこうして見知らぬ男に掴まっているかという、それはおそらくだが数時間前にさかのぼる。

真夏の寝苦しい暑さと喉の渇きで目を覚ました。冷たいお茶を飲むために、階段を降りると空からしわがれた声が聞こえてきた。声の方を見ると山吹色の山伏装束の男が月に照らされて浮かんでいた。見るからに怪しいので無視して冷蔵庫のある台所に向かうとすると目の前にその男が下りてきた。

「お嬢さん。こんにち。どこかに行きたいところはございませんか？ どこへでもご案内しましょう」

「ホントに、どこへでも行けるの？」目の前の男を怪しみつつも聞く。

「ああ、この巻物を使えば、大隅国だろうと蝦夷だろうとひとつ飛びさ。それに常世の国にだって行ける」と手にした巻物を広げる。

月明かりに照らされた巻物を見ると、見たこともない文字が所狭しと書きつけられていた。この珍妙な巻物一つでどうにかなると思えない。もしそんなことが本当にできるとしたら。会いたい人が一人いる。

それは数年前に病気で亡くなったおばあちゃんだ。もう一度、会えるのであれば、どうしても謝りたい。

「じゃあ、私のおばあちゃんに会わせてください。どうしても伝

えたいことがあるんです」

ふむ、と男は腕を組んで空を見上げ、言葉とも音ともいえる声を出した。

「お前のその会いたいというおばあちゃんとやらはすでに亡くなっているな。どうして会いたいと申すか？ 常世の国は生者が行くにはあまりに危険な処ぞ」

静かに頷く。この男が言うようにおばあちゃんはすでに亡くなっている、会って話す機会などない。会えるのであれば、ぜひ会って謝りたい。

今から十年前のあの日、七歳だった私は近くの駄菓子屋でお菓子を買に行くための金を探してタンスをあさっていた。右上の若草色の袱紗が目についた。この中に小銭が入っているかと思い、開けてみると小銭中ではなく梅のかんざしが入っていた。それは可愛らしくて、自分でもさしてみたところ思ったより似合っていることに満足した。元に戻そうとしたときに手を滑らしてしまい、畳の上に落としてしまった。運悪くその衝撃でかんざしの先端が折れてしまった。このことがバレると怒られると思い、そのままズボンのポケットにしまい自宅に持ち帰った。今も勉強机の中には梅のかんざしがしまっている。そのことをおばあちゃんにいう前におばあちゃんは今亡くなってしまう。あれはおじいちゃんから贈られた大切なものだということは何度も聞いて知っていたのに。

落とされないようにしろよと男がいう。男を掴む手が男の二の腕をしっかりと掴んだ。

では、ゆくぞと掛け声とともに先ほどの巻物を広げると同時に一人ぐらい通れるぐらいの大きさの穴が出現し、男は私を連れてそこに飛び込んだ。穴の内部は思ったより広く、仄暗かった。男が高速で移動しているため、確かにしっかりと体に掴まっていなと落とされてしまいそうだ。恐る恐る下を見ると、底が見えなかった。落ちたらどうなるかは考えないようにしよう。後ろからいくつもの光の粒がついてきていることに気づいた。

ここで冒頭に行きつく。

「そういえば、まだ名乗っていないな。儂は愛知坊だ。お前は？」

「中根あかり」

「おかしな名だな。それは」

私の名前はそんなに変なのだろうか？ あかりなんて没個性な名前をつけられたことを恨んだことはあったが変だと感じたことはなかった。私を連れて飛んでいるこの愛知坊という男のほうが名前にしても、空を飛んでいるこの状況にしても普通じゃない。

「あなたは何者なの。死んだおぼあちやんに会えるなんてありえないことを言って、誘拐しようって魂胆じゃないでしょうね」

愛知坊は力カッと笑い、口を開いた。

「お主のような小娘をさらってもなんの価値もない。それに無事に元の場所へ送るから安心してくれい」

そういわれても安心はできない。何しろ死後の世界に行くのだ。男にしがみつく指の先が痛くなり始める。指先のしびれが限界に達し愛知坊の腕から離れかけた時、愛知坊は速度を緩め地面にゆっくりと着地した。

助かった。

「着いたぞ。ここが常世の国だ」

ここ来るまでに通ってきた仄暗い道とは異なり、明るく緑にあふれ、私たちがいる世界とあまり変わらないように思える。

「ここにいる者どもは生者を死に誘う。だから、儂から離れるなよ」

「あなたは、いいの？ あなただって生きているでしょう」と指摘する。

「それなら大丈夫だ。ここらへんにいる雑魚どもなら大抵は蹴散らせる。万一、儂が負けそうなつても空を飛んで逃げればよい」

愛知坊がこういつているのであれば多分、大丈夫だろう。ふと、現実の自分の身体が気になった。まさか、死んでいるわけじゃないだろう。そんな私の表情を見て、愛知坊は口を開いた。

「浮世の世界にお前の体はない。心身ともにお前はここにいる。だからこそ、生者にとつて常世の国は、」

突然、額に痛みが走った。そこに触ると血がついている。愛知坊は懐から素早く何かを取り出し空に向かって投げつけた刹那、周囲が瞬いた。

「大丈夫か？ 少しだけ油断した」

時代がかった口調ではなく、優しい口調なので驚く。あの言葉遣いは演技なのだろうか。

「顔を怪我したけど、ピンピンしてるから大丈夫」

とボォーズと一緒に返答する。愛知坊は安堵の表情を浮かべ、何か言葉を呟いた。

「なら、良かった。一応、魔除けの呪文をかけた。しかし、それ9

でも完璧ではない。早く、おばあちゃんを見つけてしまおう。このあたりにいるはずだから」

そう言い残して愛知坊はどこかに行ってしまった。

周囲を見渡してみるほどに見慣れた景色に驚く。家の縁側に座っている人を見つけさらに驚かされた。それは亡くなったおばあちゃんその人だった。見つけたのはいいがなんと声を掛けたらよいのだろうかと迷っているとおばあちゃんも私に気づいたようで、驚いているようだ。

「あなたがここに来るのはまだ何年も先のことだと思っていました。ようこそというのも変かもしれないけれど、あなたにあえて嬉しいわ。今、お茶を淹れてくから待っていてね」

そう言い残して奥にある台所に入っていた。

「言い忘れていたが、生者のお前は常世国のものを口にしてはいけない。この食物は生者を死に惹きつけるだからな」

さつきまでどこかに隠れていた愛知坊が忠告した。分かったという代わりに頷いて同意を示す。縁側に座り、遠くを見つめてみるとここが死後の世界とは思えず、庭に植えられている沈丁花や松の木が自分は七歳の頃に戻ったかのように思わせるほどそっくりだ、いやそのものといっている。

「おまたせ、あかり。冷たいお茶だよ。遠かったでしょう。何せ、400 km以上の道のりを来たのですからね」

そんな距離を愛知坊につかまって飛んできていたのか！ いたい現世ではどれだけ時間が経ったのだろうか。まさか、朝になっていないだろうか。そうなれば家で寝ているはずの私がいなくなったことを両親が心配するに違いない。心配だけで済めばい

い。今後は自由に外泊ができなくなる可能性が高い。

大きく息を吸い込み気持ちを落ち着かせてから口を開く。

「おばあちゃんにどうしても謝りたいことがあってここに来たんだ」

おばあちゃんは目をパチクリさせ、ようやく口から出た言葉が謝りたいって何を、だった。

「十年前の夏、おばあちゃんが大切にしていた梅のかんざしを折って、それをこっそり家まで持って帰った。あの後、おばあちゃんが探しているってお母さんから聞いたとき、ちゃんといえなかった。だから、謝りたいの。あれは、おじいちゃんからもらった大切なものだって知っていたのに。本当にごめんなさい」

「ああ、そのこと。そんなことを気にしていたのね」と懐かしむようにいう。

「あれは大切なものなんでしょう。どうしてそんなことついているの？」

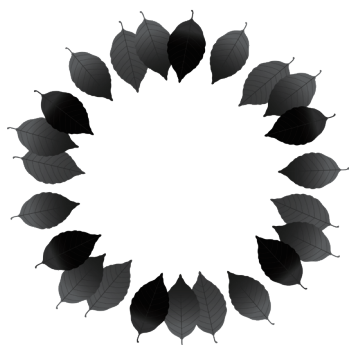
「それはね。あなたがあのかんざしを折ったことも持って返ったこともきづいていたらよ」と諭すようにいうので、あっけにとられているとこう続けた。

「あかり、あなたが帰ったあと、小銭を取り出そうと思ってタンスを開けたらなくなっていることに気づいた。多分、あなたが帰ったのだらうと思ったわ。それで良かった。いずれ、私が亡くなったとき、すでに亡くなってしまったけれど梅のかんざしはあなたに贈らうと考えたから気にしなくていいのよ」

おばあちゃんにこういわれてしまったのは折角、ここまで来た意味がないわけではないが無駄にした気分になる。でも、自分の思

いを伝えられて良かった。

気づいたらベッドのいた。顔に痛み覚えて鏡を見た。



マサエキ・マサオ 教育



私が念願のスマホを手に入れたのは高校入学直後のこと。

まずはラインをダウンロードして、幼馴染の隆君に『おちんちん』と送りました。

私の初めてのメッセージは正確に送信され、既読マークが付きましました。

私は呆然とし、そして怒りが込み上げてきました。

これは何かの間違いで、私は何か別の言葉を送ろうとして間違えたのです。たとえば、近しい言葉を訂正して送れば隆君への誤解も解けるでしょう。私は再度、隆君にラインを送りました。

「おふいんふいん」

送信したと同時に、先程より早く既読が付きましました。

同時に私は、先程より更に深い絶望を感じましました。

勿論、私はこんなことを送ってたわけじゃない。

もっと知的な、意味のある言葉を送らなければ。

「フィンランド」

三つ目の文章を送ってしまった数秒後、私は一つの結論に行き着きました。隆君を殺すしかない。

近所の公園で三十分後に待ち合わせをし、私はサバイバルナイフを持って家を飛び出しました。

朕は国家なり、と昔の偉い人は言いました。ああそうだ。私はそう言いたかったんです。決して、おちんちんの話をしたかったわけではありません。ちんちんは股間にあり、という言葉が頭をよぎって腹がよじれるほど笑っていたのは内緒です。

公園に着くと、外は既に暗くなっており、夕闇を背に隆君は立つ

ていました。隆君は残暑厳しい九月にも関わらずロングコートを着ていました。なんだろうと思っていると、振り返りざまコートの前面をバツと開いて私に見せつけてきました。その下には靴下以外何も身に着けていませんでした。

「違うんだ」

隆君は涙目になって私に訴えかけてきました。サバイバルナイフを右手に持ったまま、私は頷きました。何故こんなことになってしまったのでしょうか。世の中は不条理です。自分の思った通りになることなんてほとんどありません。私は思わずもらい泣きしてしまいました。

その時です。隆君のおちんちんが、むくりと起き上がって語りだしました。

「いいや、まったく違わないよ諸君。朕の言葉を聞きなさい」

今日起きた出来事のすべては正しく、予定調和のうちに起きたのだと彼は言いました。その声は隆君とは違い、威厳に満ちた太い声でした。

「いやいや違いますね、それはまさに詭弁に過ぎませんよ」

今度は私のポケットから声が聞こえてきました。

私はポケットからスマホを取り出しました。私のスマホが勝手に喋っているのです。最近のスマホは凄い機能が付いているものだとは私に感心しました。

「あれはこの世の諸悪の根源。今すぐ抹殺すべきものです」

スマホがフロントライトで指し示しているのは、どうやら隆君のおちんちんでした。私が改めてサバイバルナイフを隆君に向けると、怯えた様に両手で股間を隠しました。

「待つてくれ。僕もまた、おちんちんという魔物に踊らされた犠牲者の一人に過ぎない」

「いいえ、待たないわ。今私とその呪縛から解放してあげる」

そう私は、隆君のおちんちんを切り落として、この世の絶対悪を打ち倒す為に駆け付けたのです。その時、私の中に『正義』という二文字が浮かびました。その大義名分に背中を押され、私の中に沸々と熱い気持ちが入り込んできました。既に私の行為は一人の問題ではなく、いわばこの世界の為に行う聖戦の様に思えてきました。

隆君も覚悟を決めたのか、ロングコートを脱ぎ捨てて臨戦態勢に入っていました。私が隆君の懷に飛び込もうとしたまさにその瞬間、ピーッと乾いたホイッスルの音が闇に響き渡りました。

「君たち、そこまでしておきなさい」

いつからそこに居たのか、海兵隊の様な格好をした欧米人の男達が五人、そろそろとやってきて整列しました。その中の隊長でしょうか、チョビ髭の男が私と隆君の間に立ち、流暢な日本語でこう言いました。

「名乗り遅れました。私たちは、フィンランド教育委員会。教育の危機を感じて、たつた今出動してきました」

チョビ髭が右手を高々と掲げると、男たちは『フィンランドの教育は世界一』と近隣住民の家々にも響く声で敬礼し始めました。そういうえば、中学校時代の先生がフィンランドの教育レベルは世界トップクラスだと喋っていたような。それにしても、こんな方々がいるとは初耳です。

チョビ髭は全裸の隆君をまじまじと見て溜息をつきました。

「嗚呼、まさに教育の敗北だ。やつぱり、日本人は揃い揃って変態なのですね。これは教育しがいがありそうだ」

「い、一体、何をする気、ですかっ？」

隆君は怯えながらもファイティングポーズをとっています。しかし、先程まで元気そうだった下半身は随分としょんぼりしてしまっていました。

チョビ髭が合図をすると、委員会の中でも屈強そうな男が鞭を持って隆君の前に立ちました。

「彼の持つ鞭は、人類の内なるセクシャルモンスターを打ち倒す為に開発された特注品。さあ、観念して教育されたまえ」

逃げようとした隆君の色白な尻に鞭の連打が襲いかかります。

「この変態があ！ 教育っ、教育っ、教育っ！」

ギャアアッという隆君の叫び声に紛れて、おちんちんの断末魔が一瞬間こえました

「この無礼者共めっ。そして、なんという不覚っ」

それっきり隆君のおちんちんは完全に沈黙し、隆君自身も四つん這いにうずくまったまま気を失いました。隆君は脱ぎ捨てていたコートを着せられて委員会の方々に抱えられ、どこかへ連行されていきました。

公園前にはチョビ髭と私だけが残されました。私は委員会の方々に感謝していました。私は隆君を殺さずに済んだし、隆君もおちんちんの呪縛から解放されたのです。

「それから君についても用があります」

チョビ髭は私の方へ振り向き、淡々と言いました。

「君のスマホには我々が開発途上だった人工知能が搭載されてい

ます。手違いで流出してしまったので、申し訳ないが回収させてもらいますよ。あとついですが、サバイバルナイフも危ないから没収です」

チョビ髭は、有無も言わせぬ速さで私の手からスマホとナイフを抜き取り、何処かの闇へと消えていきました。

後日、私の家に最新型のiPhoneがフィンランドから届きました。隆君は何も覚えていない様子で、普通に学校に通っています。私が送ったラインの内容も言いふらされていないようで安心しました。

一体、あの夜の出来事は何だったのか。フィンランドも、喋るスマホもおちんちんも、思い返すとまるで夢の中の出来事の様です。

ある日の地理の授業中、先生が北欧の地図を指して言いました。「ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの位置関係は、ノル上、下スウェーしたら玉がフィンフィンする、と覚えてください」微睡んでいた私は、それを聞いてはっと目が覚めました。言われてみれば、北欧の三国はおちんちんの形をしていました。その瞬間、私が隆君を殺そうとしていたこと、隆君が露出性癖を持っていたこと、フィンランド教育委員会が教育の危機を救ったこと、などがフラッシュバックしてきました。

その時、私の中に浮かんできたのは『感謝』という二文字です。私はフィンランドのおかげで殺人犯にならなくて済んだし、最新のiPhoneを手に入れることが出来ました。流石サンタクロースの国、彼らは独自の技術で瞬間移動装置を既に開発しているに違

いありません。それを可能にしているのは、やはり教育なのでしょう。私は、フィンランドと、そして私をより良い方向に導いてくれる教育に感謝し、より一層の勉学に励もうと心に誓いました。

喫茶店文芸 2022 年 9 月号

発行：喫茶店文芸

監修：マサユキ・マサオ

編集：氷川省吾

HP URL

<http://literarycafe.wp.xdomain.jp/>



喫茶店文芸

2022年9月号